1-1

一一月一二日（九〇年）、平成天皇の即位礼のあの日。

湾岸危機など忘れたかのように、テレビの画面には即位礼関係の映像が繰り返し映しだされていた。そんな中、いちばん私の興味と笑いを誘ったのは、一秒の狂いもなく進められた正殿の儀に参列したチャールズ皇太子の、皮肉たっぷりの感想を伝えるアナウンスだった。

「イギリス人では、こうはいかないだろう」

一連の即位礼に象徴されるように、日本人ほど、分刻み秒刻みの予定に従って、行動することを是とする国民はほかにいないだろう。

一見、そこには整然とした社会システムや誠実な国民性が映しだされる。が、反面、時間、規則にしばられて、出会い、驚き、笑いといった〝暮らしのハプニング〟を楽しめない融通のなさが伺われる。チャールズ皇太子の言葉は、それを痛烈に批判しているように思えた。

天皇陛下は、夜の饗宴の儀では、挨拶する各国の代表一人一人とにこやかに言葉を交わされ、当初の予定より一時間近く終了時間が延びた。そのニュースになぜかほっとしながら、「時間を忘れているときほど、時間を大切にしているのかも知れないね」というインスタントコーヒーの宣伝文句を思いだした。

私たちの日々の生活に目をやれば、その場の状況に応じて機能が作動するファジイ製品を続々と生み出しているのに、当の人間様に関わる福祉制度をはじめとする社会の仕組みは、効率や数の論理にしばられたまま、ファジイになっていない部分が多い。

たとえば、新幹線の障害者用の個室の指定券は、どういうわけか、最寄り駅のみどりの窓口では買えない。

まず、乗車二日前までに、新幹線の発着駅（東京近郊なら東京駅）の駅長室へ電話で予約を入れる。そして、乗車日以前か当日に駅長室へ出向いて、予約票を受け取り、それを持って、みどりの窓口で切符を買わなければならない。特に東京駅の場合、これが厄介な作業になる。乗車日の前に、切符を買うためだけに、障害者もしくはその関係者が余計な時間とエネルギーを使って、〝東京駅詣で〟をする。これだけでも、制度の不備を露呈してはいないだろうか？　朝はやく東京を発つことが多い私は、たいてい前もって、母に受け取りに行ってもらっているが、遠い地域から乗り継ぐ人は、物理的に東京駅への事前詣でなどできない。

また、乗車当日に切符を受け取る場合も、余計な時間とエネルギーは要求される。

東京駅には、障害者用の待合室、エレベーターが丸ノ内側にある。だから、車イスの人は全員、そちらを利用することになる。ところが、新幹線（ＪＲ東海）の駅長室は八重洲口にあり、切符

を買うには、その間を往復しなければならないのだ。急いでも、私の歩行器では優に三〇分はかかり、これからはじまる旅のための気力も体力もハーハーと息切れしてしまう。障害者用の待合室にあるインターホンで頼めば、駅員さんに切符を持参してきてもらうこともできるが、その場合、発車の一時間前には待合室に着いてくれといわれる。

いずれにせよ、決められた時間ばかりを気にして、自分の時間を楽しむことが難しくなる。もし、最寄り駅で切符を買えるなら、一時間近く余裕ができるのだが……。ＪＲに最寄り駅で買えない理由を尋ねると、

「最寄り駅だと、東京駅で待合室からホームまで案内する駅員の手配ができないので」

という答えが返ってきた。

しかし、ファックス、コンピューターでの情報伝達が全盛の時代、駅間のその程度の手配は簡単にできるのではないか？　ちなみに、ＪＲは近々、携帯用パソコンと本社の端末を結んで、新幹線内でも空いている指定席を買えるようにするという。

そんなことを聞くにつけ、〝どんな人にも優しいファジイな社会〟が早く訪れてほしいと心から思う。そうでないと、チャールズ皇太子の皮肉が、また、つぎからつぎに聞こえてきそうだ。